TAKE FREE

THE MUSEUM OF THE FOREST, TOWN AND PEOPLE IN KANEYAMA, MOGAMI.

MORI TO MACHI TO HITO NO MUSEUM IN MOGAMI.

森と町と人のミュージアム
傳
-tutaee-
Vol.1

森と町と人の
ミュージアム

http://kaneyama-museum.jp/

発行日
2015年3月31日

お問い合わせ
金山町教育委員会

住所
山形県最上郡金山町
大字金山 662-1

電話
0233-52-2902

FAX
0233-52-2903

あなたは、自分の町のことをどれだけ知っていますか？

私たちが住む金山町は山形県の最北部に位置し、町土の78％が森という山々に囲まれた、人口およそ6000人の小さな町です。秋田県との県境にあり、歴史的にも大事な要所とされてきました。

昭和58年度に策定された「新金山町基本構想」の柱である「街並み(景観)づくり100年運動」により、昔ながらの街並みづくりが官民一体となり行われその景観の美しさに惹かれた多くの人々が、一年を通して訪れるようになりました。昔殷なにげなく目にしている建物。あちらこちらから湧き出る水と豊かな緑に囲まれた山々。時代の流れが変わっても、その環境こそが独自の歴史や文化を作り、人々により守り伝えられてきたとも言えます。

そして、当たり前にある全てが金山町の魅力をつくる一つ一つのパーツになっているのです。

では、私たちが伝えていくべきことはどんなことでしょうか？金山町の本当の良さを知り沢山の人に伝えることが出来れば、こんな素敵なことはないのです。

本書では、そんな金山町の魅力を写真とともにご紹介します。

金山町の基 kiso

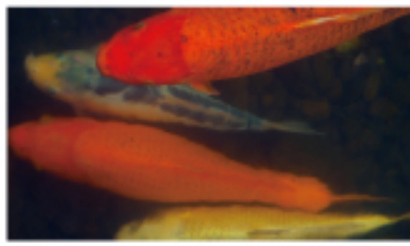
街並みづくり100年運動／project ／ P.03
龍馬山／ryuba-san ／ P.04
谷口銀山／taniguchi-ginzan ／ P.05
交流サロンぽすと／kocyu-salon post ／ P.06
マルコの蔵／maruko's-kura ／ P.07

金山町の起 kigen

稲沢番楽／inazawa-bangaku ／ P.11
安沢歌舞伎／yasuzawa-kabuki ／ P.12
柳原番楽／yanagihara-bangaku ／ P.13

金山町の軌 kiseki

クロスカントリー／crosscountry ／ P.16
壁画プロジェクト／wall-painting ／ P.17



街並みづくり100年運動

江戸時代には、秋田県や青森県からの参勤交代で栄えた小さな宿場町でした。羽州街道沿いには漆喰の白壁と切妻屋根の旅籠や、商家、蔵が立ち並び趣あるとても美しい町でした。

しかし、明治19年の大火により多くの建物が失われ、やがて訪れた世界大戦。戦後、激しい時代の変化とともに新しい建築方法が登場し、町の厳しい自然環境に耐えられるような機能性やデザインを重視した住宅が増えていきました。それは金山町が持つ、ふるさとの風情を感じさせる景色とは言えないものになってしまったのです。しだいに金山の人たちは、美しい街並みや景観が失われていくことに危機感を抱くようになっていきました。昭和30年代に入ると「全町美化運動」がすすめられ、町民たち自らによる町内の清掃などが積極的に行われるようになりました。自分たちの町は、自分たちでキレイにしていこうと――。

そして、昭和58年度に町が掲げた「新金山町基本構想」の中心となる政策として、『街並み（景観）づくり100年運動』がはじまります。これは行政と町民が一体となり、100年かけて町全体をまわりの自然・風景と調和した、金山らしい美しい街並みをつくっていこうと、そして町の中心産業である林業などの振興や、人と自然がともに生き豊かな暮らしを具体的に実現していくことを目的としたものです。この政策が施行されて以来、金山杉を用いた金山住宅が毎年10数棟も建てられ、町に活気をもたらし、やがて町は昔ながらの景観を取り戻したのです。

2012年に町の中心地は国交省の最高賞である「まちなみ景観大賞」を受賞し、町民の気付きからはじめた街並みづくりは、全国に誇れるものになりました。それは、自分たちの町は自分たちで守り、つくっていこうとする町民の強い気持ちと、山々に囲まれた厳しい気候から、助け合い暮らしてきた結束力が実った結果にはかなりません。

「町全体を風景としてとらえ、周囲の自然や歴史的資源が美しく見え、かつ住民が住みやすく、風景と調和する美しい町をつくる」とは、町が掲げたもの。
けれど、古くからある故郷の風情と個性豊かな街並みを、より美しく誇り高い郷土につくり上げることを、誰より望んだのは金山の人たちだったのです。

金山町の
基
-kiso-

龍馬山

この町を訪れた人ならば、まず目にするであろう山々。町を囲むようにあるその景色は、この土地を訪れる人に癒しを与え、観光資源としても大きな魅力の一つとなっています。そして何より、山々は金山町そのものを形づくり、私たちの生活において常にある、水、燃料、地元の野菜にいたる全てのものが、豊かな自然からの恵みにほかなりません。

自然とは時に厳しい環境をも作り出します。私たちのご先祖さまは、その厳しさから逃れることも、歯向かうことも決してしませんでした。目の前にある豊かな自然と向き合い、ともに生きることで学び、その術を文化や技術として身につけ、豊かな暮らしを手にしてきたのです。

現代においても、身の回りにある便利なものだけに頼らず、ひとつずつ手を掛け自然の流れに寄り添うことから『自然の営み』ははじまるのです。

そこに山があるからこそ、学び得る自然からの豊かな営みに守られた金山町がこれからもあり続けるのです。

谷口銀山

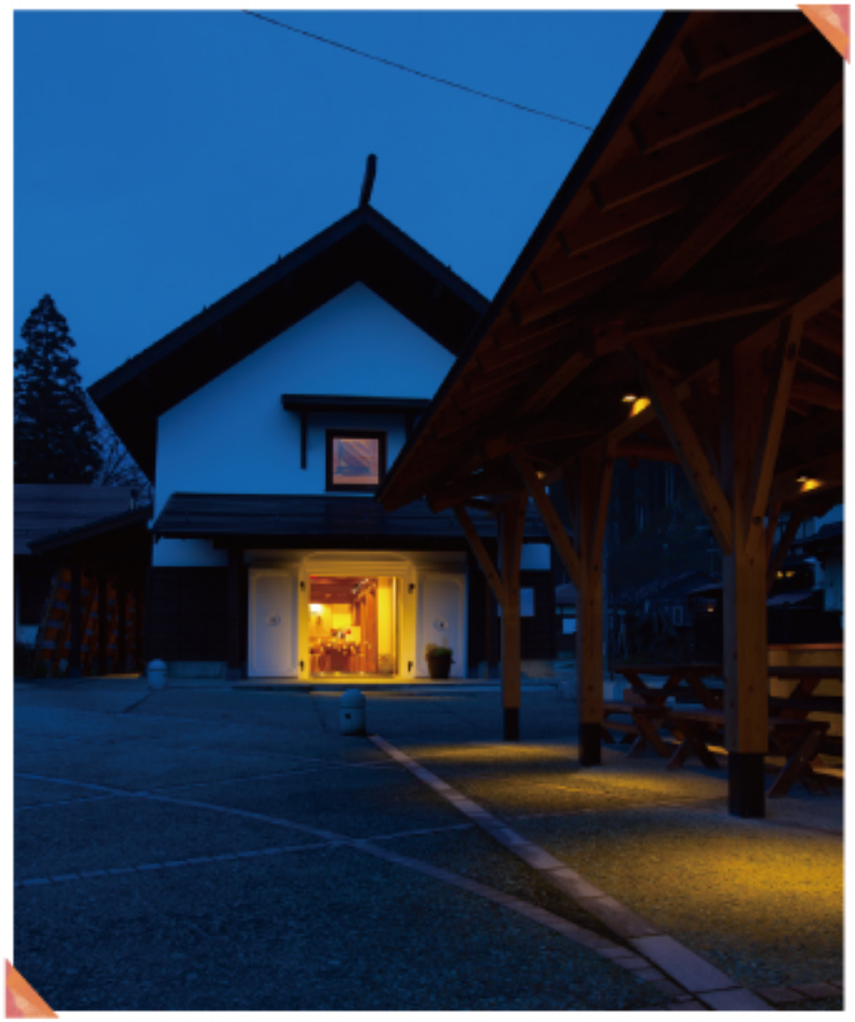
「谷口銀山が金山町の地名の由来である……」そう言われるようになったのは何故でしょうか。

谷口銀山は、文治の頃に金売吉次（かねうりきちじ）により発見されたと伝えられています。その後、江戸時代に本格的な発掘作業が行われ、最盛期を迎えた頃には金堀居小屋が3000軒のほか、芝居小屋などの娯楽施設があちこちに作られ、その盛栄は想像以上のものとされています。また、谷口銀山から採れた生銀を牛一頭に120キロずつ7頭の牛につけ、1日も休まずに7ヵ月間、新庄藩城下に運んだといわれ、このことから、谷口銀山は新庄藩の財政を大きく支えていたと言っても過言ではありません。しかし、莫大な財産をうむがゆえに『隠し鉱山』とされ、当時の記録がほとんどないのも事実なのです。

さて、歴史を紐解くと、はじめて金山を指す地名が登場するのは、はるか昔のことが書かれた『続日本紀』という書物の中です。そこには『737年、蝦地・比羅保許山（ひらほこやま）に……』と書かれ、この比羅保許山が現在の金山・有屋地方であるというのです。その後、759年には『平戈（ひらほこ）』という名称で書かれ、明治生まれのおばあさんが、実際にこの辺りをそう呼んでいたことを知る人が今もいるのです。

新庄藩にとって重要であった谷口銀山の存在により、金、銀が豊富に採れたことから『金山』と名付けられたということ、一般にはこの説が有力とされています。しかし、それ以前には『ひらほこ』以外の地名は伝わっておらず、谷口銀山発見から戦国時代に『金山城』が築城されるまでの400年もの間、『金山』の由来の根拠となるものはありません。

鉱夫により掘られた入口が銀山のあちこちで発見され、そのほとんどは未だ発掘されず、多くの謎に包まれています。しかし、銀山の全貌が明らかになるとともに、町の名の由来となる秘密が、歴史あるこの町のどこかに眠っていて、未来の人の手によりその鍵が見出されることを願わずにはいられないのです。



マルコの蔵

マルコの蔵は、江戸時代に宿場町だったころ商家として栄えた西田家が明治38年（1905年）に建築し所有していた蔵を「町づくりに活かして欲しい」との想いから、町に寄贈され、建物を再生し造られた施設です。西田家の屋号が「㊥（マルコ）」だったため、その名前をそのまま引き継ぎ平成25年7月に街角交流施設としてスタートしました。

蔵は二棟からなり、金山杉がふんだんに使われた代表的な金山建築で、軒に足を踏み入れると杉のぬくもりを味わうことができます。

小さな蔵（西蔵）では、町にゆかりのある方々や金山町のまちづくりを紹介しており、町の歴史に触れることができます。大きな蔵（東蔵）1階の喫茶コーナーでは飲み物のほか、町特産の米の娘豚を使った軽食が提供され、町民の方々の取り組まれている産物や作品を紹介する役割も担っています。2階の展示スペースからは、木目の窓枠が額縁となり、そこから眺めた景色がまるで絵画のように見え、それぞれの窓から見る角度によって趣が変わり、色彩豊かな四季折々の景色は金山町の財産とも言えるものなのです。

所在地／山形県最上郡金山町大字金山363
お問い合わせ／マルコの蔵
電話／0233-32-1212
営業／10：30～19：30・年中無休
（カフェ／10：30～15：00／17：00～19：30）

交流サロンぼすと

金山町の街並みづくりにより、住宅や店舗に伝統的な工法が施され、風格のある街並みの中心部に、その建物は佇むようにあります。昭和11年に地域特定郵便局として建てられ43年間もの長い間、町民に親しまれ利用されてきました。地域特定郵便局とは主に、市街地や住宅地にある窓口専門の郵便局で、地域の人にとってはとても身近な存在なのです。

その後、昭和53年に新しい郵便局が別の場所に建てられたことに伴いその役割を終えると、しばらく所有者の倉庫として使われていました。建物自体はほぼ新築時の状態で残されており、各地で郵便局の建て替えが進んだ現在では、当時の様子を知ることができる貴重な建物だったのです。そんな中、時とともに老朽化が進み、維持管理が難しくなってきたことから、平成12年に町が譲り受け、昔ながらの雰囲気を残した復元改修という形でこの建物が誕生しました。

外観は、現代では大変珍しい半切妻屋根と下見板張りが特徴の木造の洋風建築物です。建物の前に置かれたダルマポストが郵便局としての名残りと、レトロな雰囲気を醸し出しています。その趣の良さから思わず立ち止まり、老若男女問わずカメラで撮影する観光客の姿が見られることからも、その人気がうかがえます。

所在地／〒999-5402　山形県最上郡金山町金山365-1
お問い合わせ／金山町産業課　電話／0233-52-2111
FAX／0233-52-2004　営業時間／7:30～19:00
アクセス／新庄駅から山形交通バス金山行きで約40分

金山町の起

-kigen-

金山町の伝統芸能

金山町には、「稲沢番楽」「安沢歌舞伎」「柳原番楽」という古くから残る伝統芸能があります。昭和30年代の高度経済成長とともに急速にテレビが普及し、近年にはインターネットなどの娯楽が私たちの身近に増えていきました。気軽に楽しむことが出来るがゆえに、それは伝統芸能の継承に関わる若い人材を減らしていくことになります。

そこで各地区では保存会を結成。地区の大人たちが指導者となり、舞の技術や演目が持つ意味までをも子供たちに伝えていくのです。そして、伝統芸能の素晴らしさを知り、舞台に立つ喜びを感じ体験することで、その気持ちを大人になってからも大切に持ち続け、未来へと繋げて欲しいという願いが込められています。

決して逆らうことが出来ない時代の流れと、暮らしに密着した地域の誇りとされてきた伝統芸能が消えていくという現実と危機感。そういう強い意志と揺るぎない情熱により、時を越えた現代においても、町民の暮らしに寄り添う身近な文化として残してきたのです。これほどの数の伝統芸能が残っているのは大変珍しいことで、誇るべきことです。

番楽や歌舞伎は、先輩から身振り手振りで教わり芸を身につけていく口頭伝承。歴史ある文化の多くは次の世代へと伝えられていきます。数百年前から地域の中で大切にされ代々続いてきた伝統芸能は、地区の人たちの尊い思いそのものです。現代に生きる私たちはそのことを忘れてはなりません。その尊く誇り高い文化は私たちの傍にあるのです。

稲沢番楽

その歴史は古く、稲沢番楽は600年の伝統をもつと言われており、言い伝えでは神室の山伏が里におりて舞ったもので、五穀豊穣・悪魔退散・家内安全を祈った民俗舞踊です。毎年旧暦の8月25日、熊野神社祭礼に祭りの頭屋で演じられ、その夜は一晩中踊り明かされました。当時は「番楽ができない人に、嫁は来ない」とまで言われ、地区の若者は時間を惜しんで稽古に励み、晴れの日に選ばれ、舞台に出演した人たちにとっては大きな誇りでした。

安沢歌舞伎

安沢歌舞伎は、今から300年前に新庄藩の殿様が地区の娯楽にと農民に伝えたのがはじまりと言われています。明治末期から昭和初期にかけて、その頃の地区の若者により「東安座」という一座がつくられ、神社への奉納をはじめ、遠くは北海道まで出かけ舞台を務めました。

柳原番楽

柳原番楽は、秋田県矢島町から伝わったものと神室の山伏が舞ったものとが融合されて今の形になったと言われています。また、獅子舞に用いられる獅子頭は『八幡様』と言われ、沢山の逸話があります。以前、獅子頭を保管していた家が火事になり燃えてしまいました。ところが、獅子頭だけが燃えずに残り、それから「生き獅子」とも呼ばれ、現在も柳原番楽で使われているのです。

稲沢番楽

1. 稲沢地区の祭り神輿／ 2. 奉納相撲（竜馬山神社にて）／ 3. 竜馬山伝説にある「竜馬」／ 4. 三人太刀（※三人立ち）／ 5. おかし舞／ 6. 祭り神輿を地区の大人と子供がともに担ぐ

柳原番楽

1. 獅子頭から頭を噛んでもらい一年の無病息災を願う／2. 獅子舞／3. 伝承芸能を担う地区の若者／4. 神楽 ／5. 神舞

安沢歌舞伎

明安子ども歌舞伎／1. 遠柳公の家来「梅王」／2. 斎世親王の家来「桜丸」／3. 藤原時平の家来「杉王」／4. 藤原伝授手習い鑑「吉田社頭　車引きの場」／5. 芝居演目を説明する「口上」／6. 芝居前に清めの意味をもつ儀式的な踊り「三番叟」

金山町の
軌
-kiseki-

クロスカントリー

「なぜ、体育の授業でスキーをするのか」疑問に思ったことはありませんか？

昭和のはじめに「歩くスキー」として北日本の学校に授業として取り入れられました。それは、雪の重さに耐えられるほどの強度を持った体育館がなかったというのが大きな理由のひとつ。しかし、山間部のスキーに適した環境を持つ金山町。昭和5年には金山小学校で校内スキー大会が開催され、このことがクロスカントリー大国の歴史のはじまりとなるのです。

昭和11年、『不況と凶作に打ちひしがれた子供たちを、いくらかでも明るくしよう』と、「最上北部学童スキー大会」が開催。当時はスキーの組織も弱く、設備も粗末だったため昭和13年の第3回大会では、真室川町の安楽城小学校の圧勝に終わりました。しかしここから、起死回生すべく金山町の快進撃がはじまります。

金山中学校が県内各種大会で優秀な成績をあげていた昭和30年代には、より一層の発展を願い、昭和33年に有志により「白銀会」が発足。「白銀少年スキー選手権大会」がスタートしたのです。

そして、この歴史ある大会から多くのオリンピック選手を生み出すことになります。そのかげには、時を経た今もスキーに対する情熱を保ち、何よりひとかたならぬ努力があったことを忘れてはならないのです。

壁画プロジェクト

平成21年に町が地域の活性化と文化の保存を目的とする「街並みづくり100年計画」につながる事業としてはじめ、山形県内の大学生が中心となり描いたものです。

しかし、壁画が描かれた背景には、中田地区の大きな変化がありました。国道13号線主寝坂道路の開通にともない、地区の景観や住民の生活様式が変わり、便利さと引き換えに姿を消すものがありました。また、平成25年度に138年の歴史ある中田小学校が廃校となることから、学生たちが題材として決めたのは子供たちの記憶でした。そして壁画に、故郷の景色や思い出、四季折々の伝統行事などを描くことで、地域住民の心のよりどころとなるようにと児童とともに完成させたのです。

その思い出は決して大それたことではなく、例えば「昨日食べた焼き鳥が美味しかった！」というような、日常にある何気ないことです。しかし、大人になったとき、金山町や地区で過ごした何よりかけがえのない記憶へと変わるのです。

どこにあるか分からないような場所にひっそりとある壁画。時代の変化とともに変わるものもあれば、変わらず守られてきたものも金山町には沢山あります。町のことを知ろうとするその一歩が、これからの金山町の未来へとつながっているのです。